



No. 100 2010. 10

(株) よかネット

NETWORK

新たな相互扶助、タイムバンキングの仕組みを考えるーその1
 ー英国におけるタイムバンキングの取り組みー 2
 沖永良部島知名町で農産加工の取り組みがスタート 5

見・聞・食

地域再生の実践組織として活動
 ー英国・グラウンドワークの取り組みー 6
 過疎集落一軒毎に「家の歴史」を聞く現場を見てきました
 ー大分県日田市中津江村の集落支援調査に同行ー 9
 地域の文化・学術の振興を支える知的インフラは
 地域総力で維持する 9
 まちづくりの「ルール」と「住み心地」 ー第4回まちづくり研究会
 「市民によるまちづくりルール策定の取り組み」報告ー 11
 津屋崎をそうついでみませんか？ ーまちづくりの現場を見に行こう！
 「津屋崎千軒そうつこうツア」報告ー 12

よかネットOBより、100号に寄せて

オチコボレ会社の“超弱気経営”の
 大黒柱の役割を担った「よかネット」 14
 もし私が「マネジメント」を読んでいたら 18
 充実した「食場＝職場」の日々 18
 あのころ仕事、いま遊び 19
 よかネット編集から学んだこと 20
 よかネット100号に寄せて 20
 よかネット100号に寄せて 21
 よかネットでの日々を振り返って 21
 「伝えること」を学んだよかネット編集 22

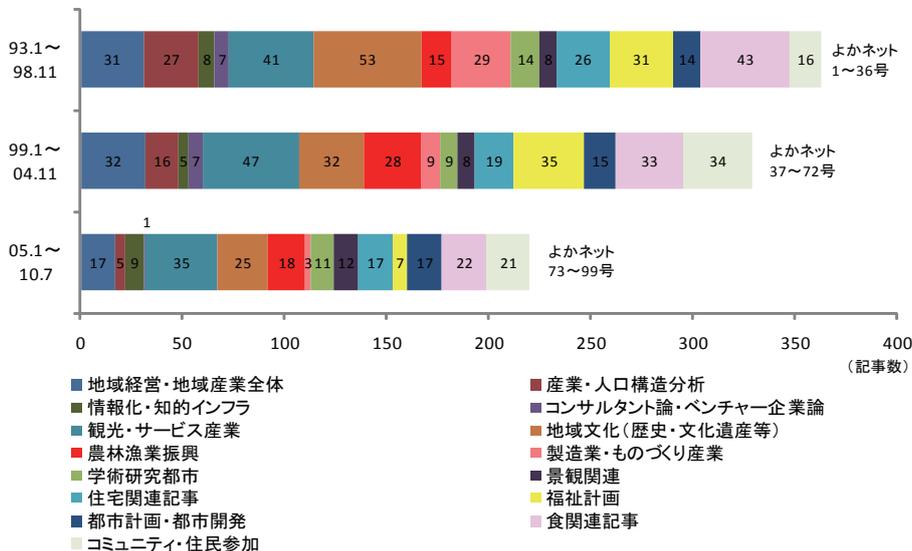
近況

人の熱気に溢れる上海のエネルギーを体験 22
 出水市で雇用創出の検討会がスタート 24
 ご当地土産の認知度って？ 24
 軍艦島に上陸できました 25

●記事テーマは「観光・サービス業」、「地域文化」、「食関連」がトップ³

弊社の機関誌「よかネット」は、本号で創刊100号を迎えました。近況や書評を除いた記事のテーマ別の移り変わりをまとめてみました。テーマは多岐にわたっており、分かりやすくするために大まかにまとめています。全体ではタイトルにあるように、「観光・サービス業」(123本)、「地域文化(歴史・文化遺産等)」(110本)、「食関連」(98本)は、仕事の関係もありますが、創刊以来、一貫して掲載してきているテーマであり、所員の興味が反映した結果のようです。

これからも「よかネット」は、地域に密着した情報発信を行っていきたいと考えておりますので、今後ともよろしくお願いいたします。



新たな相互扶助、タイムバンキングの仕組みを考えるーその1 ー英国におけるタイムバンキングの取り組みー

原 啓介

昨年度、NPO 法人グラウンドワーク福岡からの委託を受け、八女市上陽町における国土交通省のモデル事業「過疎地域における安心・安定の暮らし維持事業」のお手伝いをさせていただきました。この事業では、地域の方々とワークショップにより、上陽町上横山地区において安心、安定した暮らしを営んでいくための具体的取り組みがいくつか提案されたが、その中の一つが「タイムバンキング」という相互扶助の仕組みである。

●タイムバンキングとは

タイムバンキングとは、1時間のボランティア作業につき1クレジットが発行され、貯めたクレジットを別の社会サービスを受ける際や地域のレストラン、カフェ、ジム等で使用出来る仕組みである。例えばAさんが路地の清掃を1時間手伝うと、Aさんは1タイムクレジットというお金の替わりになるものをもらう。そして、その1タイムクレジットを使って、1時間語学を習うといったボランティアを受けることができる。この取り組みは1980年代にアメリカで始まり、現在は世界26カ国で導入されている。

7月に、グラウンドワーク福岡の方々がウェールズを訪問され、タイムバンキングの取り組みを視察されるということなので、弊社の山田と私も参加させていただいた。



ブラインガルー地域の街なみ

●地域の概要

南ウェールズ地方、ブラインガルー地域は、主要幹線道路から離れた溪谷地域に位置する中山間地である。かつては産炭地として栄え、地域の人口は16,000人であったが、1985年の炭鉱閉山後、環境汚染による住民の健康悪化、主要産業喪失による経済の悪化、若者による反社会的行為、インフラ未整備、主要建物の老朽化と閉鎖等の問題が山積している地域である。結果として、人口は7,500人に減少し、生産年齢人口のうち約3割が失業している。

このような地域におけるコミュニティづくり、活性化などの手段として、2004年からタイムバンキングが実施されている。

●運営主体について

タイムバンキングを運営しているのは、クリエイション・ディベロップメント トラスト（以下CDT）という組織であり、チャリティオーガニゼーション（日本で言うNPO）として2000年に設立されている。

今回の視察では、CDTのドーン・デービス所長をはじめ、数人のスタッフの方々に話を伺うことができた。

CDTの事業費は560,000ポンド（7,300万円）、スタッフはフルタイムが13名、21名がパートタイムである。スタッフの人件費は宝くじの基



タイムセンター。1894年建設の労働会館を改造した趣ある建物

金や行政からの補助金で賄われている。

タイムバンキングのための運営資金は宝くじ基金からの助成金、イベント時の協賛金を活用しており、運営資金は年間 80,000 ポンド（日本円で約 1,200 万円）である。

6 月末時点での CDT への登録者数は 720 人である。発足当初は、チラシを各戸に配布するなど、地道な活動をして会員獲得をしてきている。活動実績としては昨年 1 年間で 25,000 タイムクレジットを発行し、うち 21,000 タイムクレジットが利用されている。

このタイムバンキングの取り組みは、「タイムセンター」と呼ばれている施設を拠点として行われている。タイムセンターは劇場、託児所、トレーニングルーム、調理室、ダンススタジオ、音響設備、事務所設備を備えており、ここで定期的にイベントが開催されている。

●貨幣価値を意識させない仕組みづくり

ドーン所長の言葉で非常に印象に残っていることがある。一つはタイムクレジットであって貨幣ではないことから、できるだけ貨幣価値という意識を持たせないこと。

2 つめは、使った時間を会員同士で共有できるようにすることであった。

タイムクレジットは地域通貨と同じように考えてしまいがちであるが、地域通貨はあくまで通貨という概念であるのに対して、タイムクレジットは「サービス」と「サービス」との交換であることを忘れないようにしないといけない。タイムクレジットの使用では、すぐ労働を貨幣価値に置き換えてしまう頭を切り換える必



クリエーション・デベロップメント・トラストのドーン・デービス所長

要がありそうだ。

●メンバー登録と活動開始

タイムバンキングを利用するためには、まずタイムセンターで、提供可能なサービスを登録申請する必要がある。その後、タイムブローカーによる面接（興味の対象、技術についての聞き取りおよびタイムバンキングの趣旨についての説明）を経て、登録の際に 2 クレジット受け取る。そして、活動リストから自分の取り組む奉仕活動を選び、1 時間 = 1 タイムクレジットとして活動時間分のタイムクレジットを受け取る、あるいはタイムクレジットを使用して自分の好きなイベント等に参加する。

●タイムクレジットを得るために

ブラインガルー地域では、タイムクレジットを得るために、住民間で以下の様なサービスがやりとりされている。

- ・コミュニティ活動のサポート
- ・買い物を手伝う
- ・語学、算数等を教える
- ・ゴミ拾いをする
- ・子供のアフタースクールの面倒をみる
- ・お年寄りのサポート
- ・機器の修理・メンテナンス作業
- ・髪を切る
- ・パンフレット配布 等

また、CDT では、ビンゴ大会等のイベントの開催、映画の上映、託児サービス、会議室貸出、OA 機器利用といった機会を提供している。例えば 3 時間のイベントであれば 3 タイムクレジット、2 時間の会議室利用であれば 2 タイムクレ



タイムクレジットは、1 時間券と 2 時間券の 2 種類がある

ジットを支払う。ドーン所長はCDTとは別に収益事業を行う「オハナ・リミテッド」という団体を立ち上げており、この団体が運営するクリエイションカフェでの食事・飲み物の割引（1タイムクレジット＝1ポンドの割引）もある。ドーン所長は「タイムクレジットで食事代を賄うようなことすると、材料費も出なくカフェの経営にも影響するし、タイムバイキングの主旨にもあわないとのことで、あくまでも割引としている」とおしゃっていた。

ビンゴ大会は、会員全員が使用したタイムクレジットの合計が一定時間使用された時に行っている。これは会員同士でのタイムクレジットの使用を共有化するための仕掛けであり、非常に盛り上がるそうである。このように参加者が楽しく、コミュニティも図られるような仕掛けは本当に上手いと思う。是非、今回、上陽町で実施する社会実験でも取り入れたいと考えている。

●タイムバンキングの効果

CDTのドーン所長によると、タイムバンキングを導入した結果、地域活動への参加促進や、コミュニティへの当事者意識が醸成されているのを感じているという。

また、ブラインガルー地域において37の地域活動グループが創出され、反社会的行為の減少、人口流出に歯止めがかかり、住み良さの向上により地価が上昇したとのこと。このタイムバンキングを取り入れた地域活動は、2008年英国都市再生協会(BURA) コミュニティ再生大賞を受賞するなど内外の評価も高い。



パレードの飾り物製作に参加

●タイムセンターは住民の活気に溢れている

我々がタイムセンターを訪れた日は平日であったのだが、タイムセンターで子供たちを対象としたイベントが開催されており、チェルノブイリからの小学生一行と地元の小学生がダンスを楽しそうに踊っていた。また、別のフロアでは、高齢者や若者が近々開催されるパレードで使用する飾りをボランティアで作成しており、我々もばっちり1時間ボランティアをさせて頂いた。たまに鼻声が聞こえてきて、非常に和やかな雰囲気であった。

●日本でも時間預託に取り組んでいる団体は44カ所ある

我が国でタイムバンキング（時間預託）という考え方が導入されたのは1970年代前半といわれており、30～40年以上の歴史がある。その後、一部の社会福祉協議会やNPOなどで使われていたが、広く普及しなかった。1990年代半ばごろから「さわやか福祉財団」の堀田さんの提唱により「ふれあい切符」として全国に普及したが、介護保険の導入によって高齢者を対象とした福祉型の時間預託制度は低迷したといわれている。

我が国の時間預託制度に詳しい公益財団法人さわやか福祉財団にお聞きすると、日本国内でも平成22年夏時点で44の団体が時間預託に取り組んでいる。国内では高齢者福祉分野での時間預託制度に取り組む団体が多く、高齢者の居場所づくりと、「周」と名付けられた時間通貨を使った相互扶助に取り組む静岡県袋井市の「NPO法人たすけあい遠州」や、ボランティア活動の記録を塗り絵手帳に付けていく取り組みを推進する「NPO法人さわやか徳島など」が活発に活動しているとのこと。

●日本におけるタイムバンキングの可能性

日本のムラ社会には、かつて結い、もやいといった相互扶助制度が存在していた。しかし、現代のコミュニティにおいては、核家族化や高齢化、人口減少などによって、その仕組みが壊れつつある。それは都市部だけでなく、中山間地も同様である。タイムバンキングは、かつてのムラ社会では必要のない存在であったかもし

れないが、現代人の生活においては、相互扶助を復活させるきっかけ、互いの感謝の気持ちを表現・交換するツールとなる可能性を持っていると思う。

そのためには、タイムバンキングのセンターであり、地域の誰もが立ち寄れるような居場所と地域で熱心に取り組む人、タイムブローカーとなる人などの人材が必要であると思う。

今年度、国交省からタイムバンキングの研究助成をいただいたので、高齢者福祉だけでなく、買い物代行、子どもの教育等、日常生活の様々な場面での利活用について、継続して研究していきたいと考えている。(はら けいすけ)

沖永良部島知名町で

農産加工の取り組みがスタート

雪丸 久徳

昨年よりお手伝いさせてもらっている知名町地域雇用創造事業『「南国知名町の人間地域資源を活かしたまちづくり」を将来像とした雇用の創出』が採択され、7月より人材育成がスタートした。この事業は、①観光分野②介護福祉分野③IT分野④農業分野の4つの柱で人材育成を行い、地域雇用を増やそうというもので、今回その中の農業分野の農産加工の支援をよかネットOBの尾崎さん(職彩工房)を中心に組み合わせることになり、9月2日～4日にかけて現地に足を運んだ。

今回は求職者と事業者を対象に「地域素材を活かした加工で島の経済を元気にしよう」というテーマでセミナーと個別相談が行われ、セミナーには当初予定した定員の倍の40の方が集まり、個別指導には15人が参加された。思った以上に参加者が多かったのは、奄美群島一勤勉勤労の島と言われていることや、これまでに保存や加工の研修機会が少なかったため、注目と期待が集まったためと思われる。

セミナーでは、離島や九州、全国の加工の事例を交えつつ、加工に取り組むにあたっての開発主体毎のポイントなどを70分程度にまとめてお話頂いた(内容は下記参照)。

2日間を通じて、意欲のある方や島素材の活

用の思いを聞いて、食や加工の取り組みを通じて町(島)を何とかしたいという気持ち強い町だと感じた。これから約2年半かけて、地元の方と一緒に島の素材を使った「外に出せる商品づくり」を進めながら、地域の加工技術の向上と町の活性化を目指して取り組むことになるが、今回、それに繋がるいいスタートがきれたと思う。次回からは、具体的に加工品づくりに入ることになる。経過は追ってレポートしたい。

○開発主体毎の取り組みのポイント

<農産物直売所(野菜や果物の活用など)>

- ・直売所と出品者の双方にメリットがある品揃え
- ・地域のもったいないを前面に出した商品づくり
- ・保存性を高めて島の外に売り出せるようにする

<農家・JA(加工品の改善など)>

- ・地域外に出荷できる簡素で確実な加工
- ・できるだけ手間を省くことを考える
 - 手にとりやすい、手が伸びるサイズと包装
 - 安価なレトルト加熱材の活用

<市町村、商工会、協議会(特産品開発など)>

- ・男性の力と女性の知恵を組み合わせる
- ・国や県や市町村など、行政からも応援を得られるような組織づくり
- ・旬の鮮度を保持する加工と地域素材を組み合わせた商品へ展開

<製菓事業者・飲食店(素材の下処理など)>

- ・素材の味わいをひき出す下処理を行いストックし、一年中使う

○商品開発と販売計画は同時に行う

- ・何処に売り込むか、販売計画を決めてから商品開発する
- ・香り、色、味わいなど、素材の組合せによる特徴ある新商品づくりにチャレンジする
- ・地域資源を活かすという言葉盛り込むことで応援者を増やす

○より魅力的な商品づくりに向けてのポイント

- ・どこに売れるポイントがあるか他の商品の素材の使い方・持ち味の出し方をよく観察する
- ・食べやすく、持ち運びやすく、味のよいもの(包装形態、殺菌処理、サイズ)をつくる
- ・許可の範囲内でどこまで商品提案が可能か挑戦する(1次加工、2次加工)
- ・地域の食の文化祭など、みんなの力を発表して試す場をつくる

○地域全体の加工技術の向上について

- ・適正な包装資材を使った加工で美味しさを出す
- ・殺菌と保存についての基礎知識を身につける
- ・効率的な施設、設備の考え方を学ぶ
- ・加工研修や身近な先生の加工所を見学する
- ・素材の美味しさ、味わいを活かす
- ・ラベル、表示上、守るべきことは守る
- ・販売を念頭においた価格・見栄え・利益
- ・素材を見直して、あらたな美味しさづくり

○加工において今後着目したいこと

- ・素材の組合せで重厚な旨味を
- ・真空惣菜の提案を
- ・素材の色を重視した加工を
(ゆきまる ひさのり)

個別指導で出てきた加工のテーマ

- ・丸仏手柑を使った新商品
- ・島ミカン等の地元素材を使った酢みそ／乾物
- ・島バナナを使ったソース、加工品など
- ・ドラゴンフルーツのドレッシング、ソース
- ・マンゴーのドレッシング、ソース

地域再生の実践組織として活動

—英国・グラウンドワークの取り組み—

山田 龍雄

7月の初旬、(NPO)グラウンドワーク福岡の大谷事務局長・齋藤事務局次長、久留米大学の駄田井教授、当社の原と私の総勢5名でイギリス・ウェールズ州の数都市のグラウンドワーク(以下「GW」)を訪問してきました。

これまでのGW福岡とウェールズのGWとの17年間に及ぶ交流で培ってきた強い絆のおかげで、はじめての訪問者である私たちも心のこもった手厚いもてなしと研修を受けることができた。そこで、今回、訪れたウェールズ地方のGWの活動の一端を紹介します。

●グラウンドワーク(GW)とは
(経緯)

イギリスでは1970年代まで「揺りかごから墓場まで」と言われた高福祉政策を実施してきましたが、高齢化の進展、生産性の縮小などによって財政の悪化は益々深刻な状況になっていきました。そこで、1979年に誕生したサッチャー政権では、徹底して民活路線の推進など行財政

改革を行いました。このような社会的背景において、サッチャー首相は行政セクターの大幅なリストラを行い、その隙間を埋めるため、1981年に市民や企業と協働で地域再生をリードしていく組織として、GWを誕生させました。

(活動分野と資金)

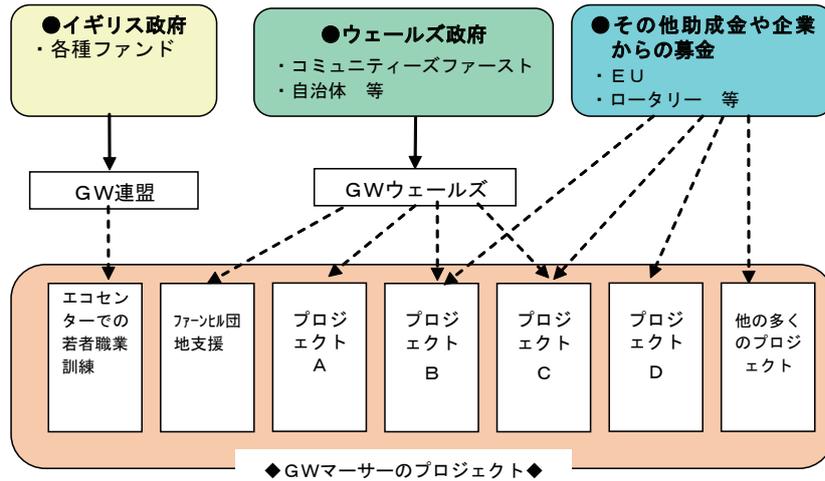
GWが取り組んでいる事業分野は幅が広く「物理的な環境改善」「教育およびコミュニティ参加」「経済と環境の統合」をキーテーマとして掲げ、身近な環境改善を基本に据えながら教育、福祉、失業問題、青少年問題、企業の社会貢献など、地域社会を取り巻く課題を総合的に取り組むことを特色としています。

活動資金は、イギリス政府の公募事業とGWの独自企画の提案事業に応募し、獲得しています。後者の場合はEU政府や宝くじの助成金に応募し、資金を得ているようです。GWの事業資金は、政府から保証されたものではないので、日本のGWと同様に、国や自治体の公募事業に応募するのは一緒のようですが、訪問した各GWに「この活動の資金はどこから調達したのですか?」と聞くと、必ず「宝くじ基金」との返事が返ってきました。イギリスと日本では「宝くじ収益」のアウトプットの仕組みがかなり違っているらしく、イギリスの方では、やる気のある活動団体へ宝くじの資金が回っているように感じられました。

日本の「宝くじ収益」を考えるに、自治体へ配分する割合を減らし、もっと地域再生に取り組んでいる地元活動団体への比率を増やした方が、より自主的な地域活動の支援へつながり、



GWマーサー・ロンド・カノンタフ事務所での歓迎パーティと自己紹介



イギリスのGW活動資金調達イメージ（GWマーサー・ロンド・カノクタフのケース）

地域が元気になるのではないかと思います。
（GWと各主体との関係）

現在、イギリス全土では40箇所GWが設立され、地域ごとで活動を行っています。

GWは、自治体、地域コミュニティ、企業等の代表者からなる「理事会」とプロジェクトを実施するスタッフで構成されています。理事会の構成員は、GWに対し資金を拠出し、理事会のメンバーとして運営に参加しています。

●職業トレーニング事業が盛んなGWマーサー・ロンド・カノクタフ

このGWのスタッフ数は37名と大所帯であり、旧結核診療所を改築したという事務所にお伺いすると、スタッフの皆さんと昼食を兼ねた歓迎パーティをしていただいた。参加者全員の自己紹介があり、英語不得意の私は日本語で挨拶したが、この時ばかりは英語の勉強をして



敷地内の一角でエコフレンドリーハウス実験棟を建設中

おくべきだったと反省。

このGWでは、現在、半年毎に60名の職業訓練生を受け入れている。イギリスでは、疲弊した地域において、これまで「無職」と宣言すれば生活費補助を受けられていたらしく、先祖3代にわたって働いたことがない世帯もいると言われていた。働く意志のない若者も多くいるらしく、失業状況は日本より悪いように

感じられた。

そこで、イギリスでは、先ず「働くこと」のトレーニングをさせて、何らかの職業についてもらうことを目的とするトレーニング活動をGWがサポートしている。

これまで無条件で生活費支給を受けていた人たちは、GWなどで職業トレーニングをしないと生活費補助の資格が受けられないシステムとなっている。事務所の広大な敷地内には、エコフレンドリーハウスの実験棟、菜園コーナー、木工作業所、教室棟などの施設がある。

ここでの職業トレーニングは、本人が目指したい分野の訓練を受けるというわけではなく、工作や菜園を通じて技術を身につけると併せて、身体を動かし、仕事の意味を教えることに主眼が置かれているように感じた。

施設内で活用し、残った木材は炭にして販売したり、敷地の一角にはミツバチを飼っており、蜂蜜の製造・販売なども行っている。これらの活動は、当GWの収益事業の一部となっているが、自主的に稼いでいる収益事業の財源は少ないようだ。

●グラウンドワークのスタッフの待遇？

次の日はGWカフェを訪問した。スタッフの待遇が気になっていたのも、ここで働いているGWスタッフの一人（キャロラインさん）に尋ねてみた。その待遇については、各GWで相違があるので、あくまでGWカフェの

ケースとして考えて頂きたい。

キャロラインさんは、ここの菜園では週に1度だけ畑作業があり、他の日は、現在、係わっている30のプロジェクトで活動している。年収は約20,000ポンド（約300万円）。キャロラインさんは考古学を専攻し、発掘調査などの仕事をを経て今のGWカフイーに就職したと言われていた。現場では、本当に笑顔を絶やさず、丁寧に説明をしていただいた。

●南ウェールズ ファーンヒル団地の再生

私と原の2人で最後に視察した場所が古い公営住宅の再生を行ったファーンヒル団地であった。当団地は1960年初頭に建設されたもので、元々2～5階建ての住棟が混在した約350戸の団地であったが、日当たりも悪く、また貧困層が居住し、あまり環境が良くないところであった。12年前に、この団地の近くで活動していたGWに団地の環境改善の相談があり、住民たちと行政とGWで団地再生計画を実施した。

具体的には4～5階建ての住棟（120戸程度）を除却し、このスペースに公園や広場をつくり、全体的に余裕のある団地とした。この団地再生においては、市の助成は少額であるため、EUの基金とコミュニティーズファースト（ウェールズ政府の支援施策）を活用した。

この公営住宅では、一人暮らしの若い人が多く入居しており、キッチンがあるにもかかわらず料理したことがない人がほとんどで、栄養管理が行き届いてなかった。これを改善するためコミュニティセンターにキッチン付き集会所を整備し、若者への料理教室を開いている。



このプロジェクトでサポートしているGWスタッフ（中央がキャロラインさん）

本団地の家賃は、約71ポンド/週（約10,600円）、月換算すると約4.3万円であり、イギリスでは非常に安価な家賃とのこと。

●団地内未利用地を菜園に活用

この団地の高齢者の方が、一部未利用地を利用した野菜・菜園コーナーづくりを提案し、地区住民有志でFLINT（Fernhill Landscape Improvement Nature Team）という団体を組織し、運営している。スタッフは中心人物の高齢者と5人のボランティアで運営しており、ここの菜園コーナーで収穫した野菜や花を市場に出して販売している。

販売収入は2,000ポンド（約30万円）である。この菜園コーナーの一角には太陽電池パネルが設置されており、蓄電された電気は電力会社へ売電している。コミュニティーズファーストの基金は10年間の期間限定であり、あと2年の猶予しかない。

このため、現在の団地内の活動を維持していくためには、他のファンドを見つけてくるか、収益事業を行っていく方法しかなく、継続のための活動の真価が問われるのは、これからのようだ。

事業費を稼ぐためには、住民の参加を促し、菜園での野菜販売の収益を増やしてはどうかと勝手ながら提案させていただいた。

我が国の集合住宅でも人口縮小時代に対応した団地再生を図っていかなくてはいけない時代となってきたなか、この団地の再生計画は非常に参考となるケースであった。

（やまだ たつお）



4～5階建ての住棟を除却し、公園や広場を整備したファーンヒル団地

過疎集落一軒毎に「家の歴史」を
聞く現場を見てきました
一大分県日田市中津江村の
集落支援調査に同行—
雪丸 久徳

最近、中津江村の集落を一軒一軒まわって「家の歴史」を聞いてまわっていると森千鶴子（森の新聞社）さんからお聞きした。そこで、現場の雰囲気を知りたいと思い、お願いして一緒に連れて行ってもらった。

場所は、大分県日田市中津江村丸蔵地区というところで、中心街から40分程山手に入り込んだところにある。高齢化率が約60%と市内で最も高く、縁辺の過疎集落を今後どう支援していくかを検討するため、市が高齢化がいち早く進んだ丸蔵地区をモデルとして取り上げ調査が始まったそうだ。

雰囲気を知りたいと思った理由は、

- ・「家の歴史」について子や親族たちと面と向かって話す機会はあまりなく、見過ごされがちではあるものの、それを次の世代に受け継ぐことは家族や地域にとって価値のあることなのではと最近思い始めていたこと。
- ・パソコンや携帯など使って、インターネット上に簡単に情報をストックできるし、またそれを見るのも場所や時間を問わず簡単にできるので、お年寄りから家の歴史や日々の様子を聞いて、離れて暮らす子や親族に届けると同時に、次世代のためにストックするサービスを事業ベースでやれないかということを考えていたこと。

そこで実際の現場はどうか、以下の5点について生の雰囲気を知り、参考にできればと思った。

- ・お年寄りの反応はどうか（家に入れてくれるか、喜んで話をしてくれるか）
- ・家の歴史というプライベートな内容を、他人にどれくらい話してくれるか
- ・家の歴史という話の内容は、子や親族の立場からみて感動するか
- ・聞いた情報や雰囲気をうまく伝えるようアウ

トプットできるか

- ・お年寄りの方言をうまく聞き取れるか

中津江振興局の方々と森さんで既に対象地区の70数軒を回られていて、私が参加したのは終盤のほうだった。ちなみに地区全体で80軒近くあり、担当の方が事前に1軒づつ丁寧に説明され、日時を調整されたそうだ。

今回は中津江振興局の方お二人と森さんと私の4人で80歳手前のおばあちゃんの家を訪問した。地元の方や家の方が知っている信頼できる人と一緒かどうか訪問して話を聞くうえで重要だそうだ。今回は訪問する家のおばあちゃんと親しい方と一緒にだったため、裏の勝手口から家に入れてもらった。

幼少期、結婚、姑、仕事、借金、祖父母、地域の祭り・行事、暮らしぶりなどプライベートな話、苦労した話、笑い話、地域の話までたっぷり2時間お話いただいた。

話の途中小学校時代に丸蔵で流行した替え歌の話で盛り上がり、当時を思い出して腹を抱えていた。よく高齢者は図書館だと言うが、おばあちゃんの知恵や名言をたくさん聞くことができたし、なにより、帰り際に、久しぶりにこんなに笑ったとおっしゃっていたのが印象的だった。（ゆきまる ひさのり）

地域の文化・学術の振興を支える知的
インフラは地域総力で維持する

山辺 眞一

九大学研都市構想の推進に向けた仕事に関連して、久しぶりに関西学研都市を訪れた。

ローマクラブの「成長の限界」の問題提起（1978年）から始まったとされる関西学研都市も30年以上が経った。1987年の都市建設促進法公布、1990年「梶けいはんな」設立、1993年学研都市の中核施設として「けいはんなプラザ」が開設され、翌1994年に都市びらきが行われた。

（梶けいはんな設立から都市びらきまでの期間に、地元大手の企業研究所や国公立関連の研究所が続々と立地した。

1996年頃から始まったセカンドステージで

	1986	1996	2009
都市人口	128 千人	195 千人	236 千人
立地施設	7 件	63 件	114 件

関西学研都市の人口、立地施設数 (推進機構資料より作成)

は、文化創造の中核づくり、文化の薫るまちづくり、立地機関のポテンシャルを活用した新産業の創出など、文化や景観、雇用開発、まちづくりなど、ハード整備に加えて、ソフトを重視する方針が提示された。

そして、2006 年から始まるサードステージ・プランでは、開発が予定されていた地区の整備が概ね仕上がってきた今、ハードの整備から、研究開発、新産業創出、文化交流活動など、学研都市としてのソフト事業が重視され、取り組まれている。

●研究支援・交流施設の維持のために

この交流連携のソフト活動を展開する要として設置された(株)けいはんなは、都市建設促進法に基づき、政策投資銀行や京都府、大阪府、奈良県の3府県、企業などの出資によって設立された第三セクターであった。

(株)けいはんなでは、交流促進、研究促進、教育研修、情報提供などを目的とし、新産業創出、ベンチャー育成支援、共同研究支援等が行われていた。その場所として設置された「けいはんなプラザ」の研究室や設備貸与の不動産事業と共に、研究者や市民向けの会議・フォーラム、講演会など、様々な事業を行っていた。しかし、景気低迷に加えて、これまでの設備投資、償却に見合うだけの事業収益を達成することは難しかったようである。結果、平成19年から民事再生手続きが開始され、ラボ棟、ホールの自治体への寄附や減資による累損の償却等の再生計画が検討され、平成20年12月に、寄付によって自治体所有となった施設の指定管理業務受託によって法人は再出発を行った。

同じ様な出来事が、今年の1月に千葉県で起こった。(株)かずさアカデミアパークが民事再生適用を受け、再生に向けた協議が進められている。この法人の場合も、1991年に千葉県が中心となって推進された「かずさアカデミアパー



けいはんなプラザから国立国会図書館関西館を望む

ク構想」の中核的施設「かずさアカデミアセンター」の運営主体である第三セクターである。1997年に、木更津市内にオープンした同施設には、ホール、ホテル、スポーツクラブなど収益が期待できるものもあった。しかし、見込んでいた東京湾アクアライン開通の効果は少なく、さらに景気低迷の影響もあり、施設利用者として期待した近隣周辺地区への企業立地も思うように進まなかったため、予定していた売り上げが確保できなかった。

2つのケースは、文化・学術・研究を核とした地域開発であり、プロジェクトの中核的な施設として設置されたものである。しかし、予定していた収益が確保できず、施設維持・運営が困難になったことが、再生が必要となった最大の理由である。文化・学術研究機能を柱として行われる地域開発の場合、中核となる知的インフラ施設が、そもそも民間事業として自立的に運営することが可能なかどうか、あるいは本当に必要な規模だったのかが当然検討されていたと思う。しかし、新規開発地域においては、まちのポテンシャルをあげるために先行的に整備すべき機能や、まちの成熟度に応じて必要とされる機能とは自ずとリスクが異なるはずであり、両機能や施設が安定して稼働していくための公、民の役割があると思う。新しいまちの成長には、段階に応じた知的インフラ整備が必要であり、まさに地域総力をあげて取り組んでいくことが必要と思う。

(やまべ しんいち)

まちづくりの「ルール」と「住み心地」
—第4回まちづくり研究会「市民によるま
ちづくりルール策定の取り組み」報告—

寺山 香

日本都市計画家協会福岡支部の第4回まちづくり研究会が7月29日に行われました。

申込みが少なかったのですが20人を超える参加者がありました。今回の研究会は(株)地域計画建築研究所(アルパック)の石本幸良さんを京都よりお迎えして、「市民によるまちづくりのルールの取り組み」をテーマに、石本さんがこれまで取り組んでこられた様々な事例をお聞きしました。

●まちの将来イメージの共有からはじまるルールづくり

以下、石本さんのお話を箇条書きでご紹介します。

- ・まちづくりにおいて、よく使われるのが「美しいまちづくり」という言葉ですが、「美しい」の定義は人によってまちまちであり、統一的に使える言葉ではないと感じていることから、まちづくりにおける理想の都市を「心地よい都市」として定義しています。
- ・市民にとって「心地よい都市」をつくるためには、まずは市民の目線で問題を把握し、どんなまちにしたいのかを話し合い、将来イメージを共有することが大切です。
- ・まちの将来イメージを言葉にした目標、作法であるまちづくり憲章やまちづくり式目などが、住民の共有意識を高めていく上では大切であり、たたき台をつくるときにはかなり熟慮します。先にルールを作ることをイメージするのではなく、どんなまちづくりを目指すのかを決め、土地利用や建物などの建て方についてのルールを守ってもらうための手段として、都市計画や建築協定などを使うにすぎません。

●『住み心地のよい』まちづくり事例紹介

今回の勉強会ではいくつか具体的な事例をお聞きすることができました。その中からいくつかご紹介したいと思います。

①用途制限・店舗誘導による商店街の復活
『納屋町商店街』

- ・伏見市にある納屋町商店街は古くからの歴史のある商店街ですが、商店街にあったスーパーが閉店。その跡地にマンションの建設計画が表面化しました。店舗の連続性が途切れることを懸念した商店街は、マンションの1階部分を購入し、店舗を設置する計画を立てました。
- ・それに伴い地区計画を立案、その計画案として①商店街にある建物の1階部分を店舗にする②商店街・住民のため深夜営業の店舗・風紀を乱す店舗の出店禁止、この2つを中心としています。また、商店街とマンション居住者間の交流会を開催するなどして、商店街の活性化を図っています。

②京都で初めての市街化調整区域での地区計画
『小出石地区計画策定』

- ・小出石地区は、京都大原のさらに山奥の地区(人口146人、世帯数43世帯)で、10年間で著しく人口減少はしていませんが高齢化率は約27%と、将来は少子高齢化・人口減少が危惧される場所です。
- ・そこで、2年間にわたって話し合いを行い、町民の合意のもと市街化調整区域における地区計画制度を導入しました。
- ・そのルールの主なポイントを紹介します。

〈土地利用〉

- ・既存宅地は50%までを限度として許可
〈建築可能な建築用途〉
- ・4m道路に面している自己用住宅は全て許可

〈建物ルール〉

- ・地区には風致地区の指定がなかったため、容積・建ぺい率・高さ等の制限に関しては最も近い市街化区域に配慮し、容積率200%、建ぺい率60%に指定

〈建築デザイン〉

- ・美しい町並み景観を形成するため、デザイン基準を「小石出建築作法」とし、屋根や外壁の形状、色彩などの細やかな基準を設定

③町内会加入をもとにしたまちづくり
『せいつつ方式』

- ・西陣にある成逸地区は、大学に囲まれている土地柄、近年マンションの建設が増加し、地域住民・マンション住民との関係が希薄になりつつありました。それに伴い町内会費の未払い問題が生じ、この対策として生み出されたのがオリジナルのまちづくりルールである「せいいつ方式」です。
- ・「せいいつ方式」は、学区内のマンションの居住者に町内会加入の義務を設けたものです。町内会に加入といっても、学生や一人暮らしの人はなかなか活動に参加することができません、そこで、ワンルーム居住者は正会員ではなく、準会員として参加をすることが可能となりました。
- ・準会員とは、正会員の行う負担を減らした町内会員のことで、会費も1/2以上と決まっています。町内会には直接参加しません(行事、町内会総会での選挙等)が、住民として情報提供や地域住民のコミュニティには参加することが可能です。
- ・「住み心地のいい」といわれるまちを末永く続けていくためには、「居住」、「なりわい」、「文化性」という要素がバランスよく成り立っていることが必要不可欠です。まちは住人がいて成り立つもの、その人達が“普通”に暮らしているまちこそが、いいまちであり、理想的なまちではないか。そのようまちであれば、本来「まちづくり」などと声高々に叫ぶことはないのです。

●理想のまちづくり

石本さんは、このような意識を持ってまちづくりをしてきたいとのことでした。しかし、理想のまちをつくるためのまちづくりのはずが、まちづくりの無いまちこそが理想であるなんて…何だか矛盾を感じながらも、納得せざるをえませんでした。

今回はまちづくりに関するルールに関して話して頂きましたが、そもそもルール=守らなければならないいきまりごと、という感覚が大きいと感じている人は多いと思うのですが、ルールは本来自分たちの生活などを守るものです。それを意識すれば、ルールに関してみんながもつ

と理解できるのではないのでしょうか。

最近、アパートやワンルームマンションが建っている地域においては、町内会に入会せず、町内会費の未払い、地域活動への不参加、ゴミ出しのルールを守らないなど地域コミュニティの問題を抱えているといった話を良く聞きます。「せいいつ方式」は、これからの町内会のあり方を考える上で参考になるのではないかと思います。

住民の共通意識を深めるにあたって、ルールの煩わしさに眉をひそめている人も多いのかもしれない。まちづくりにおけるルールづくりのためには、そんな人への理解度を深めること、その人たちが少しでも煩わしさを感じないように配慮すること、その必要性を感じました。

(てらやま かおり)

津屋崎をそうついでみませんか？

—まちづくりの現場を見に行こう！

「津屋崎千軒そうつこうツアー」報告—

寺山 香

7月24日、津屋崎でのまちづくり見学ツアーを開催しました。

事の発端は都市計画家協会の総会の時に講師として来て頂いた「海とまちなみの会」代表吉村勝利さんに、日本都市計画家協会賞を受賞した「海とまちなみの会」の取り組みの話をお聞きしたときのことでした。その後の懇親会で、「海とまちなみの会」が行っている津屋崎千軒ツアーを是非体験したいという声があり、今回の企画が立ち上がりました。

●猛暑のなかでまちあるき

当日は快晴に恵まれましたが、今年の猛暑は皆さんも記憶に新しいとおおり。とにかく暑かった…これではたしてまちあるきができるのか？と少々不安に感じたりしましたが、集合場所である『津屋崎千軒なごみ』に集まった吉村勝利さんをはじめ「海とまちなみの会」のガイドの方々は、「早速行きましょう！」とそんな不安もなんのその、先導してくれました。

まずは津屋崎千軒のなかにある豊村酒造へ。

その道すがら、家と家の隙間の細い路地から海がみえました。この光景のことを「すあい」といい、津屋崎千軒ならではの言葉だそうです。

酒造に向かう途中にもいくつか歴史的で立派な建物がみられました。これらは行政の保存対象になっているのかと思っていましたが、どうやら市が買い取って保存しているものと個人で行っているものがあるようです。住民の町並みへの想いや建物に対する愛情を垣間見ることができました。

●随所にあふれる建築の工夫

豊村酒造では、正面にある立派な龍の鍔絵（左官が壁を塗ることで書いた装飾）の美しさに驚きました。鍔絵はお金のある家でないと装飾されないいわば贅沢品。うっすらと灰色がかっているのは、戦時中に絵を塗りつぶせとの命令があったからだそうです。中にはいると、立派な家とその空間に感動しました。高い天井には大きな梁が何本もかけられていました。この梁は、「塩木」と呼ばれ、太い梁をそのまま海水につけ、十分海水に浸かったところで乾かし、塩風にあてることで強くしたものだそうです。土間から少しあがったところにある居間も昔の趣にあふれていました。

ふと斜め上をみると二階の廊下が…途中で切れていました。何事かと尋ねてみると昔は女中さんが寝泊まりしていた小部屋が2階にあったのだとのこと。そのコメントからも、当時の繁栄が見て取れるようでした。

●地域の全体が観光地

続いて江戸時代から続くお菓子屋さん、上田製菓に行きました。津屋崎千軒地区の建物は、



豊村酒造の天井。「塩木」の梁に、左端にちょっと見えるのが途中で切れた廊下です。

平屋で縦に細長い建物が多いため、中を見るためには店の奥の方まで入っていかなければなりません。何だか申し訳ない気持ちになりながらも見学をさせてもらいました。つづいて津屋崎人形店へ。津屋崎で作られる津屋崎人形は博多人形の流れをくむ土人形です。代表的な「もま笛」（「もま」は津屋崎弁でふくろうのこと。）は元々お年寄りが喉の通りをよくするために吹いていたようで、まさに生活に土着しているといえます。ここでもまた細いみちを通過して店の奥を見学しました。昔の人形が飾ってある人形店の一角（ほぼ民家）はちょっとした博物館のようで、年代ごとに招き猫がどのように変化していったかなどを楽しく見学させていただきました。

歩きながらも、そこかしこに卯立や鍔絵が見受けられました。昔の津屋崎千軒の面影は、今はわずかしか残っていませんが、そのわずかなかに歴史が詰まっていることがわかります。

その後、新泉岳寺、教安寺、波折神社と巡りながら、恋の浦の悲恋物語と、津屋崎の漁場を広めるために命を張った義民六子の話を聞きました。

●ガイドさんたちの知識の深さに脱帽

気が付いたら炎天下のなか2時間も歩き回っていました。そろそろ休憩がしたいなということで、お昼は元タバコ屋を改装した古民家カフェ「古小路」へ。このカフェは日替わりでお店が替わり、土日は『ごはんや古小路』としてランチセットなどを食べることができます。他の曜日にはパン屋や雑貨屋にもなるそうです。とてもステキな場所なので他の曜日も行ってみ



津屋崎人形の「もま笛」。ガイドさんのTシャツにも「もま」の絵が描かれていました。

たいです。

ランチをいただきながらガイドの方々とのお話しする機会がありましたが、ガイドさんたちの知識の深さには感銘しました。歴史上の人物、津屋崎の地理、歴史と造詣が深い。津屋崎に関しては歴史学者並みの知識があるのではないかと感じたのですが、本人たちは「まだまだです。帰って歴史書読まなくちゃ。」の一言。歴史書は調べ物をする時しか使わないと思っていた私は、この言葉には驚きました。

●「まちづくりはひとづくり」の想い

午後からは津屋崎千軒のシンボルであり、国の登録有形文化財でもある藍の家で「藍の家保存会」の会長、柴田富美子さんのお話をお聞きすることができました。藍の家は元々平成4年に取り壊される予定だったそうですが、「何もかも壊すだけではだめ。残していかなければいけないものがある」という想いを持った、画家であった柴田さんの旦那さんをはじめとする人々が集まり、「町並み協議会」を結成しました。それから、ワークショップや町ぐるみの展覧会を開催し、その功績から平成6年には藍の家の取り壊しは中止となりました。

それ以来、地元の女性を中心となって藍の家保存会は活動していますが、町並みが欠落していくなかで保存をしていくのは本当に大変だそうです。今は会員と行政からの助成金で運営をしています。

「欲張ってまち全体を変えようとするよりもまずは一軒一軒活動をしていくことが大切。」とおっしゃっていましたが、今回みた古い建物を個人的に保存している家主さんたちにもその思いが伝わっているのかもしれない。



元タバコ屋さんを改装した古民家カフェ。中も雰囲気があります。

まちづくりの話だけでなく、福岡県知事がきたときの大掃除で、ガラスを拭こうとしたら100年前のもので怖くて掃除できなかった。そしたらよりにもよってそこに興味を持たれてしまった！といった、笑ってしまう話などもお聞きでき、2時間ほどではありましたが楽しい時間をすごすことができました。

無事にツアーは終了し、これからの展望について聞いてみると、「調べれば次から次に歴史や面白い話が出てくるので、まだまだ紹介し足りないぐらい。今はツアー1つだが、今後は増やせていけたらいいですね。」とのこと。地元に対する藍…ならぬ愛を感じました。

(てらやま かおり)

よかネット OBより、100号に寄せて

総 オチコボレ会社の“超弱気経営”の大黒柱の役割を担った「よかネット」

糸乗 貞喜

●最初に見せられたのは、4000万円の不渡り寸前の手形、1984年

月例訪問のつもりで福岡へ来て、事務所の作業台の所へ座っていると「ちょっと相談があります」と、副所長から声を掛けられた。「なんですか、どうぞ」と応えたが、「ちょっとここでは」と言って頑張られて、やむなく喫茶店へ行った。なかなかしゃべらない相手に「なんかハッキリ言え!!」と怒鳴るようにいってやっとう口を開いた。手形を切っていてそれが今月末の期限だが資金手当の見込みがない、というようなことを言った。

「分かった。今から事務所に戻って確かめる」といったら、「所長にいつからでない」とと渋ったが、「こういうことは時間を争う」といって事務所に戻って確かめた。9月3日月曜日の朝のことである。見ると、1000万円額面のものが4枚、100万程度のものが何枚かあった。そのほかに所長の親元の保証・担保の銀行借り入れもあった。

問題は、これが不渡りになって、「その筋の方」に廻ったら何が起こるかである。

まず第一の解決策は代表取締役である所長と親元であろうが、ご両親はおそらく青天の霹靂で、対策は出ない。

第二は「100%の子会社か。本社の責任だ」となり、おそらくその筋の人は、両親を巻き込んで「一緒に本社に責任を取らせよう」となると思った。

次は第三の解決策で、「本社で全部負担して、清算してしまおう」であるが、「清算した上に、子会社の従業員も全部本社で引き取る」というようなことが、組合に対する対応も含めて、役員会で簡単に決まるとは思えない。「誰が悪い、彼が悪い」「誰の責任だ」などといった議論を始めると、手形の決済期日までに結論が出るかどうか分からないと思った。

第四の策は、①本社の役員会に相談することは止めて、専務として、本社の金で手形を取り戻し、②会社の継続については九州の所員に任せる、だった。

経営の実態を見ると、人件費が福利厚生費をふくめると、年間売上高を上回っていた。こういう状況を前提にして、「この会社とそれぞれみんなの今後をどうするのか、相談して決めてほしい」と、みんなに問うた。結局私が案を出さざるを得ず、今後仕事が見込めない分野の人や契約社員のような人には辞めてもらうことになった。なぜそんな人がいたかという、仕事の話があると「すぐに人を増やす」という習性を、所長が持っていたからである。

●自立経営を前提にしなかった、甘い方針のツケがきた

もともとこの会社は、九州支店としてスタートしており、その段階で本社役員会では激論があった。それは①支店として本社の管理下におく、と②遠く離れているので管理が行き届かないので別会社として自立を前提にすべきだ、という二つの方針であった。結局、別会社にすると、対外的な書類の従業員数も少なくなるから営業上不利になるなどで、前者を多数決で決めた。私の危惧は排除されたので、別の担当役員がついた。私は支店の経営にはタッチしなかったが、大幅な赤字に加えて数百万円の飲食費が

出ており、2年もすると本社でも不満が起った。

3年目には「なんとかしないと本社も持たない」といっだした。九州担当役員が「このまま行くと本社ももたない。専務が責任を持って問題解決をすべきだ」といっだした。「この方針は問題だから、私はタッチしないと断ったはずだ。いいじゃないの、本社も潰れても」と断ったが、「ここまで来た状況を解決できるのは専務だ。だから専務が責任を持つべきだ」という意見が出た。

私はやむなく、「今現在の赤字は本社で引き取る。別に500万円の資本金を出すから今後は自立してやってくれ。本社は口を挟まないが相談があれば、自立を前提に聞く」と言うことで別会社を設立した。

別会社と言っても100%出資であり、支店時代の放漫な経費支出の癖がついていたのだと思う。所長も不幸だったのかも知れない。

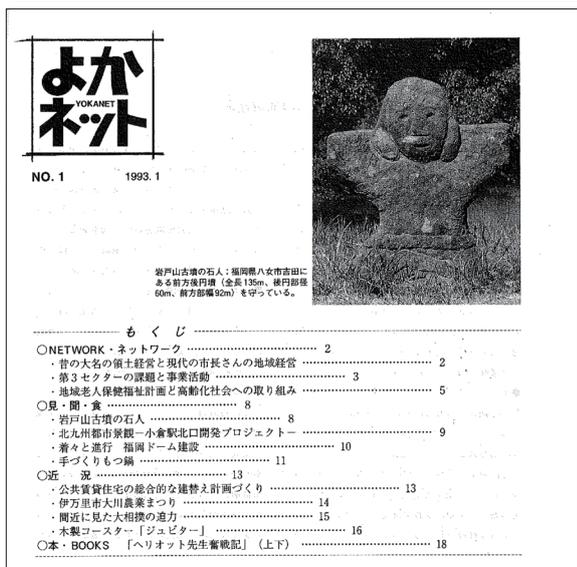
●一ヶ月弱の決断で「超弱気型経営」で再出発

今回の赤字は、本社ヘツケを回すというような方法は採れない。手形の振出人も銀行借入れの責任者も本社ではない。具体的に手形が残っており、それがその筋に廻ったら、手形額面以上の被害になるかも知れない。

本社でも、役員が赤字補填を決めても、組合や一般従業員にとって受け入れられる話ではない。

結局、変な話だが、当面本社で立て替えておいて、最終責任は糸乗が九州子会社の社長を兼任し、お金は「改めて本社が保証人になって、糸乗社長が銀行から借り入れる」ということになった。私個人としては大変なリスクを被ることとなった。強いて個人的なメリットを上げれば、「その筋の人」が京都までやってきて進行中の仕事や、受注先にまで嫌がらせをやられたら、「糸乗が専務でいながら、なんだ」と言われる。それをさけられることにはなる。しかし、これだけの負債を被るといようなことは、とても家族に言えるような話ではない。

とにかく、実質的に半分（契約社員のような形の人）辞めてもらい、残った5人と「受注量



よかネット第1号

を二倍、仕事の品質を上げる」という相談をした。目標は受注二倍、支出二分の一である。とにかく受注を増やさねばならんが、私自身はコネもないし訪問しやすい先があるわけではない。本社で出していた「ニュースレター」に九州の記事を載せてもらい、それを持ってネットワーク型の事務所を目指し、全員で訪問営業をすすめた。

九州支店が赤字で本社の足を引っ張っていた頃、本社自体も楽ではなかった。その時取った方針が、「外向き経営＝不況だから節約というような内向きになるな」で、そのツールとして1983.7に、全員が訪問営業をするための「ニュースレター」を作った。一応、本社に見本はあったわけである。

駅前などで、「特訓」と称して、数人の人が大声で怒鳴っていることがある。あれは営業というものの訓練らしい。私などは側を通るだけで挫けてしまう。とてもこんな会社には、一日も勤まらないと思ってしまう。私は、「何か、一見役に立ちそうな、情報らしきものを持っていると、訪問するモチベーションが起こる」という錯覚でやっていくしかないオチコボレなのである。

●つくば研究交流センターでは、新聞紙大の月刊壁新聞を作っていた

丁度この頃、つくば研究交流センターの河本哲三さんに親しくして頂くようになった。関西

学研都市と関わるようになったからである。私がアルパックで「ニュースレター」を作ったのは、前記のように1983年であるが河本さんは壁新聞を作っていた。

つくばに行ったときに見せてもらい、これは“かなわん野郎”だと思った。手書きの壁新聞だった。私も「泥臭くやる」つもりで、立派な人の原稿をお願いしたりせず、すべて自前の見聞を記事にしていたのだが、「手書きまでとは」と唸った。手書きの新聞をコピーして、配ったり、郵送したりしていたのである。手書きをする系の女性は「大変なんですよ」と言っていた。

この壁新聞の創刊は1979年1月だから、アルパックニュースレターより遙かに早い。国立の機関が、壁新聞を出すなどということは、河本さんの並々ならぬ“情報へのこだわり”がないと出来ないことだ。

残念ながら河本さんは、今年の一月に亡くなられた。九州へも何度も来て頂き、有田へも行った。東京でも何度もお会いし、「糸乗は食べ物にはうるさいからな」などといいながら食事もいただいた。7月18日につくばで「偲ぶ会」があり、参加してきた。全く分け隔てがなく、飾らない人だったからか、気分のいい人たちが来ておられた。彼は死んで、みんなに楽しいひとときを残してくれた、と感じた。

●ネットワーク活動の実践と超弱気経営

- ① 1984.10 九州地域計画研究所として、赤字を抱えて再スタート。本社のツールを活用
- ② 1987.11 事務所を天神のアクロス前に移転し、一層ネットワーク型を目指す
- ③ 1993.01 九州独自の機関誌「よかネット」を発行する
- ④ 1993.06 「ひとネット・よかネットパーティー」開催
- ⑤ 2000.06 社名を「株よかネット」に変更

能力とパワーのある経営者や、そのような企業ならいざ知らず、1年分の売り上げ以上の赤字を持って再スタートする超零細企業に、確固たる経営方針があるはずもない。とにかく地域に必要な会社になれば、使って戴けるかも知らんし、続けていけるだろう。“続くこと”が会

社の最大の目標だと考えていた。

オチコボレ（私）が経営する場合の会社は、自分に自信がないので、あるいは、自分が出来ないことや、自分がしんどいと思うようなことは、従業員に“やれ!!”といえないので「営業活動をするのが、楽なようにするには、どうしたらいいか」を考えざるをえなかった。我々は情報サービス業なんだから、とりあえずお金を掛けずに、情報サービスを試みようが、営業活動そのものであった。

その帰結が、「本社で貯めてきた情報を、持って訪問してみよう」であった。

①から②までの間は、社長は給料がもらえない状態だったので、本社のツールと九州のニュースを組み合わせたパンフレットなどで活動していた。

3年たった頃からセミナーなどもやるようになり、事務所を情報産業らしく、人々が立ち寄りやすい場所に移した。「移転お披露目パーティー」をやって手応えを感じ、それがのちの「よかネットパーティー」になった。

独自の機関誌を出した方がいいと判断し「よかネット」をつくり、「パーティー」もやった。その中で「糸乗さん、誰でも入れていると自分の営業用の名刺稼ぎをするヤツが来ますよ」とか「人が良すぎるなあ、参加者だけが人もうけしていますよ」とかいわれた。所内からも「我々はサービスに追われていて、来た人と話をするヒマがない。人もうけにならない」等という意見も出た。

しかし私にとっては、「ああ、やっとこれだけの人が来てくれるようになったか」という感慨の方が大きい気分だった。ボスが一番自信がなく、チンケな野郎だったのである。

● 2000年には社名も「(株)よかネット」に

もともとこの会社は、私は再建のために来たのだし、いずれ九州の所員に返すつもりではいた。何時だったか、よく記憶していないが、当初からいた所員が退職して、同業の会社を作った。「いつまでやる気なんだ」というサインのようにも感じた。

その節目として、悲惨な赤字からスタートし

た会社としては、「給料1年分の現金、1年分の受注業務量」を考えた。五千万と一億五千万円である。その節目にほぼ達したので社長を退任して、九州出身者に譲った。

この気分というのは、27才の頃最初に就職した会社が倒産した時の経験である。私は管理職として組合からは抜けていたが、組合員の要求で組合に戻って委員長になり、再建活動に関わった。当時の経営者や、再建をサポートしてくれた経営者に恵まれて、再建が出来、みんなが安心した。

実は、私はみんなの将来を考えて、賃金債権としてかなりな金額を抑えていた。再建に加わらずに辞めていく人には1ヶ月分払ったが、残る人の生活費などを考えてストックしていたのである。ところが、新会社の社長に、進行中の仕事を譲渡することになっていた（実はこの仕事の担当者が私であった）、遅滞なく進めねばならなかった。それで新社長は「翌月から給料は出す」といつてくれた。私は「社長、組合で株を持ちましょうか」といったら「そんな生意気な(?)金はいらん」というようなことをいった。結局金は余ってしまったので、「何時何があるか分からんから」といつて組合で貯金することにした。当時は「一万三千八百円」の歌が流行っていた頃だった。金額は150万円余りあったと思う。4、50年前のことで、結構大金であった。

私は再建後一年で、会社が軌道に乗ったと思って退職した。社長は、私が退職することに対して引き留めはしなかったが、極めて不機嫌だった。この時の吉村社長は、経営者となった私の、第一の師匠だと思いつている。

あの金はどうなってしまったのかなあ。

● 100号記念というけれども

「よかネット100号に寄せて」というテーマで書けということだったが、私は10年以上前の30号辺りで代表取締役を退任している。ずっと以前から取締役でもないのに、100号は今の経営者の問題で私としてはなんの感懐もない。何となく還暦=60年ということには、歴史的な意味があるように感じてはいるが、私は自身

は、もともと100回だとか、10年だとかに余り興味はない。

実体として、決算が単年度黒字になるとか（これは再出発の翌年ぐらいにはなった）、累積黒字になるとか（3～4年でなった）の方が気になっている。30～40年以前の京都のアルパックの頃も、「3月の期末に、11月、12月までの給料分の金を持とう。給料の借り入れをしなくていいようにしよう」が口癖だった。経営者という人種は、赤字になったら給料が出ないわけだから、給料が払える、人様より少しは多く払えるが生き甲斐だ。

だから、社長を譲ったときには本当にホッとした。

今後とも、「よかネット」のネットワーク型企業、人もうけ集団の意図が生きて、発展してくれることを望んでいる。（なお、オチコボレ論については、私のブログ「オチコボレ流＝otikoboreryu」に“オチコボレ流の生き方”として書くことにしています）

（いとりの さだよし）

■ もし私が「マネジメント」を読んでいたら

伊集院 豊麿：大分県立工科短期大学校

歴史に「もしも」は、禁句である。それを承知で、九州地域計画研究所在職時点で、もし私がドラッグの「マネジメント」を「もっと真摯に」読んでいたら、と思う今日この頃である。

高校野球の女子マネージャーが主人公で活躍する小説との違いは、現在形と過去形。この違いは大きい。

60歳を過ぎた今、改めて、マネジメント、顧客、マーケティング、専門家、人の強みを生かす、イノベーション、人事、真摯さなど、ドラッグが提起した重要な指摘に関心を持った。

当時の私は、「顧客」は、国と地方自治体と決め付けていた。自治体が事業を構築する際にお手伝いをする役こそコンサルタントの役割と思い込んでいた。「分かりきった答えが正しいことはほとんどない」とは気づかずに。

さらに、一步深く「顧客は？」との問いかけに向き合い、この委託された仕事は市民からの委託であり、委託費を自治体の人口で割った場

合には一人当たりの委託費に見合う仕事をしているか？という問いかけの意味が十分には分かっていなかったのである。

今回、高校野球の女子マネージャーが教えてくれた最も重要なことは、「真摯さ」である。

よかネットの原稿を書き、手間隙をかけて発行することと、コンサルタントを組織的に機能させて経営することがしっくりとは結びついていなかった。

つまり、コンサルタントの仕事や作業と同等に、一見「無駄」に思えることをしながら、直接社会に貢献することが、意欲をわかせる、今日の活力を生み出す源泉だと、岩崎夏海著「もし高校野球の女子マネージャーがドラッグのマネジメントを読んだら」は教えてくれた。

教育の世界でも「マネジメント」が問われている「顧客」から始まる組織の存在理由と、マネジメントに欠かせない資質「真摯さ」は共通している。今からでも遅いことはない。

（いじゅういん とよまる）

■ 充実した「食場＝職場」の日々

尾崎 正利：（有）職彩工房たくみ

「これはウマイデー」「何や感動せん味やなー」。

夕方になると誰かが何かをつつきはじめる「食の調査研究」を行ったかつての職場の風景を思い出す。

在職していた頃、私は仕事の捌きが悪く、平日は遅い時間まで、そして休日も朝から出勤し、と会社に張り付く時間は多かった。今だとコンビニが頼りになるのかもしれないが、当時事務所のあった福岡市天神にそうした店は全くなかったため、夕方からの食の調査研究は小腹を間に合わせるのにも都合が良かった。並んでいた食の内容も乾きモノのつまみなどではなく、京都祇園のいづうのサバ寿司、日田のうるか、長崎の魚のすり身揚げ、隠岐島の活きサザエ、中津の豚皮焼きなどかなり高品質のものばかり。

出張に行った人が手ぶらで帰って来て土産話だけしようものなら、それは皆に責められたものだ。反対に誰かが出張先から大量の土産を持

ち帰った日の夕方は事務所中が明るかった。

糸乗さんが言い出したのだと思うが、「食場＝職場」とはよく言ったものだ。企画書のキーワードを食場の会話の中から書き留め、それで仕事が獲れたことは私の場合、結構多かった。

日中ボーッとしているのに、夕方から元気になる人もいて、仕事のオチのつけ方やアウトプットの内容を活発に話す情報のやりとりの場にもなっていた。今だと長時間のダラダラ労働のように見られるのかもしれないが、各地の食文化や人の暮らしの話、地域の特性などの情報の共有という点では実に役に立った。

最近、各地で直売所の活動は盛んになり、大きな集客力をもつ施設も増えたが、こうした産地直売所の前身である産地朝市の取り組みが地域の新たなパワーになると注目し取材し継続的に観察していた組織は、15年程前の頃、西日本新聞「農に吹く風」を連載されていた佐藤弘さんを除けば、私が知る限り、よかネットなどごく少数だった。

地域の担い手の活力をどう生かして経済に結びつけるか、あるいは商品づくりをどう進めるかなど、地域の将来的な「もてなし」の実力を見るためにも取材を重ねる。食場でそうした取材方針を決めたりもしていた。

このところ、よかネットの若手のお誘いで一緒に特産品開発などの仕事をさせていただく機会が増えてきたが、今でもこの「食場」はスタッフ皆が情報交換する場として機能しているようだ。OBが久しぶりに食場に参加する日が近いかもしれない。楽しみである。

(おざき まさとし)

あ あのこと仕事、いま遊び

伊藤 聡：(株)大同鉄工所

まずは、機関誌「よかネット」100号おめでとうございます。私がよかネットを離れてもう5年ですか。「九州地域計画研究所」時代から12年もお世話になりました。

私が入社したとき、機関誌「よかネット」はまだ生まれたてで、新入社員として紹介されたのは第3号でした。ちょうどよかネットパーティーも1回目のときです。私は学生時代に雑

誌編集のアルバイトをしていたこともあって、取材をして記事を書いたり、レイアウトしたり、校正したりと、一応かじっていました。なので、早速編集の手伝いをするようになったときも、それほど苦勞しなかったように思います。

「よかネット」に書いた記事で印象に残っているのは、デビュー作の「阿蘇山の雲海」(No. 3)と、「大横綱の孫、あらわる」(No. 67)でしょうか。我ながら表現がうまい。特に「大横綱……」は今読んで笑えます。記事にして良かったな、と思うのは「グラウンドワーク福岡」の一連の活動報告(1995年～)、「地域コミュニティづくり」シリーズ(2001年頃)、旧稲築町での取り組み(2003～04年)などでしょうか。稲築町(現嘉麻市)の住民の方々とは最近久しぶりにお会いする機会があり、一緒に作った公園花壇も継続して管理しておられ、嬉しくなりました。グラウンドワークは今でも会議や活動に参加しています。

現在、私はふるさとの直方市で鉄工所を手伝っています。と言っても現場で機械を動かしているわけではありませんが。私の曾祖父が創業し、今年で105年になります。直方市は筑豊の石炭産業を支えた鉄工のまちで、今でも沢山の鉄工所がありますが、まあ、そのものづくりの一端を担っているということになるのでしょうか。

実は仕事以外の活動も忙しく、コンサルの経験を一市民として生かそうという気持ちもあり、いろんな住民活動やグループに首や足を突っ込んでいます。今話題になりつつあるのは、直方は人力車の発明者泉要助の出身地ということで、「人力車のふるさと」としての活動、そして人力車の部品製作をしていることです。その他、地元独身者向けに婚活出会いパーティーを開いたり、商店街を楽しくするためにトリックアートを作ってみたりしています。また、高齢者の孤独死や無縁社会の話を耳にして、次は高齢者の出会いパーティーも必要なのかな、と秘かに考えています。

よかネット時代に身につけて今でも役に立っているのは、一番は「博多にわか」に弟子入り

したことですかねえ。年に数回は披露する機会があります（よかネットのときより多い）。「にわか伊藤」で覚えてもらいやすく、“芸は身を助く”を実感しています。（いとう さとし）

【総】よかネット編集から学んだこと

小田 好一：耳納ねっと！事務局長

私は学生の時、デザイン系で、大学院の時に修士論文を書いたものの、指導教官との連携プレイみたいなどころがあり、自分の力で文章を書くということをしたことがあまりありませんでした。おまけに自ら進んで読書をする方ではなかったので、入社当時は特に文章を書くのが下手で億劫になっていました。しかし徐々に社員の方々から刺激を受け、少しずつ書くということを鍛えられました。

よかネットの原稿を書くための取材は初めての経験でした。何となくでもストーリーを頭に描いておかないと何を聞いていいのかわかりませんでした。それまで旅行に行っても出会った人の話をただ何となく聞いていただけでしたが、「これはよかネットに書けそうだ」と思うと、詳しく聞き、事細かにメモを取るようになりました。これが後に旅行を数倍おもしろくすることになりました。

よかネットの編集での思い出すことはいくつかありますが、まず割付の時は、「ここは新入社員の腕の見せ所だ」と意気込み、パソコンを使えることをPRしようとパソコン上で割付をしましたが、割付表に手書きで書いた方が圧倒的に早かったことを覚えています。（今はどうされているかわかりませんが・・・）また、表紙を作成するときは「言いたいこと」よりも「見栄え重視」になってしまい、よかネットの表紙で受け継がれている「何か訴えるもの」は何もない表紙をつくってしまい、指摘を受けたことがよくありました。

しかし、このとき学んだ文章の執筆や編集が、後に自分にとって活躍の幅を広げることになりました。職場やボランティア活動の場では進んで広報の役を買って出るようになり、これまで数多くの広報誌を手がけてきました。今年の7月には、うきは市観光協会でも広報部会長を

仰せつかることになり、うきは市の内外に向けて情報発信を進めていくことになりました。ただ、よかネットのみなさんのような厳しいご意見番が周りにいないので、内容チェックが手薄になっているのが事実です。デザイン重視で自己満足な広報誌にならないよう、心がけていきたいと思います。ありがとうございました。

（おだ こういち）

【総】よかネット 100号に寄せて

田中 かおり（旧姓：七瀬）

「よかネット」第100号おめでとうございます。お手紙を頂き、久しぶりに在籍していた頃の「よかネット」に目を通しました。自分が書いた記事は、古い日記に目を通すようで、恥ずかしくもあり、懐かしくも思いました。

事務所のよかった思い出と言えば、『美味しいもの』を沢山食べられたこと。『人もうけ』が出来たことです。

入社して間もない頃、調査研究と称して、山田さんと黒木町の霊巖寺の精進料理をいただいたことは、楽しい思い出です。新人の私は、これが調査研究??と驚き、後日調査研究の言い訳が成り立つように、必死に「よかネット」の原稿を書いたのを覚えています。

2ヶ月に1度、「よかネット」の原稿の締め切りがやってきて、報告書の締め切りと重なると、文章を書くことが苦手な私は、それはもう大変でした。原稿のネタがない時は、私は2ヶ月間何をやって過ごしたのだろう?と反省し、「よかネット」の原稿書きがその時々の振り返りの機会となっていたように思います。

結婚出産を機に退社をして横浜に住みました。その後、新潟、群馬、埼玉と転勤を繰り返し、今は千葉県浦安市に住んでいます。

浦安市は、私立中学の受験率が高い地域です。また、ディズニーリゾートがあり、お金を使って楽しむ地域だと思います。学歴や金銭的な豊かさに惑わされ、子育てや自分の生活スタイルに迷いが生じます。そんな時、よかネットで出会った人達のことを思い出します。十人十色の生き方です。特に思い出すのは、山田市で自給

活をしていた重松博昭さんのことです。お金を稼ぐことよりも、生活を営むことを重視している方だと思いました。そういえば、重松さんのことも「よかネット」に書いたと思います。

さて、最後に近況です。私はガールスカウトのリーダーとして、集会やキャンプの企画、運営を行っています。多くの子ども達の成長を見られるというのは、楽しいものです。子どもと一緒に私も成長したいものです。

これからも「よかネット」楽しみにしています。
(たなか かおり)

経 よかネット 100号に寄せて

藤井 真紀子 (旧姓：澤谷)

よかネット100号刊行おめでとうございます。

私が当時入所した会社は「(株)九州地域計画研究所」でした。「(株)よかネット」に名称変更してから既に10年、気持ちだけは20代の自分があります。「(株)よかネット」という名は機関紙「よかネット」からきていますので、これだけ続けるのはすごいことだと思います。

余談ですが、会社が名称変更のきっかけとなったのが「よかネットカード」(地下鉄とバス共通で使えるプリペイドカード)の登場です。「よかネット」という言葉はこちらが先、しかし相手は地場の大手企業、商標登録どっちが先だ！で当時、山辺さんが奮闘していたのを覚えています。その「よかネットカード」は今では姿を消し、「nimoca(ニモカ)」に政権交代したのです。

入社1日目、福岡での生活は数日目、初めての電車通勤で緊張？の私は、西鉄の天神駅にある大きな階段を降りている途中、足を滑らせ尻餅をついたまま10段くらいトントントン…と下りました。恥ずかしいやら縁起がわるいやら…しかし周りの女性数人が抱え起こしてくれ、声をかけてくださいました。「福岡の人は優しい…」と前向きに考え会社に向かったのを昨日のことに覚えています。

行った会社はとんでもなかったです。今でも思いますが、あんなに自由で、仕事でパソコンに向かう以外は社員の好きにさせている会社はないと思います。まず、朝来てから寝てる人が

いる、「ちょっと…」と行って本屋さんや病院などに出かけていく人、九州の食の本をじっと読んでいる人…。現在ではかなり様子が変わっていると思いますが、自由な風はきっと吹いているのだろうと思っています。糸乗さんの「無駄なことをせなあかんで」という言葉、今なら「一所懸命に」という言葉が省略されていたのだろうということがわかります。(株)よかネットに籍を置かせてもらっていた時、表面だけ調べてわかったふりをするのではなく、色々なことに興味をもち、とことん突き詰めて考えていれば、もっと違ったことが見えてきていただろうと思います。

現在は結婚出産し、パートで働きながら毎日の生活に追われています。しかし、保育園の保護者会の代表をやらせてもらったり、地域では民生児童委員を任されたり、やっぱり地域づくりのお手伝いをしています。

(ふじい まきこ)

経 よかネットでの日々を振り返って

南出 里香 (旧姓：梶原)

よかネット100号、おめでとうございます。

私はよかネットを退社後、2年ほど佐賀市に住んでいましたが、主人の地元である北九州市に戻り、現在は市内にある大学で事務の仕事をしています。

大学時代の恩師にご紹介いただき、よかネットでお世話になることになりました。正直なところ、どのような仕事をしているのかを十分理解できていないまま、飛び込んでいったという感じでしたが、今振り返るといろいろな経験をさせていただき、本当に充実した日々でした。

一番印象に残っている仕事は、稲築町(現嘉麻市)で稲築公園のシンボルづくり(日時計・花壇)のお手伝いをさせていただいたことです。

住民参加の事務局グループの会議が毎月開催されていたのですが、前回の会議の内容がわかるよう、手書きで新聞をつくっていました。

会議ギリギリになって作業することが多く、「手書きにするんじゃないか〜」と思いながらも、私自身がとても楽しんでつくっていた新聞でした。

今回、原稿のご依頼をいただいた際、自分が在籍していたころは何号ぐらいだったのだろう？と、よかネットを閉じたファイルをめくりました。

懐かしさと同時に、なかなか原稿が書けなくて、パソコンの画面の前で腕組みしながら考え込んでいた自分の姿を思い出していました。

5月の終わり、千葉から福岡へ里帰りしていた友人に会うため、息子を連れて久しぶりに「モンブラン倶楽部」（親富孝通りの一角にあるスナック・よかネット58号でご紹介）へ足を運びました。

そろそろ帰ろうかな？とっていたところ、山田さんと寺山さんがお店へ。久しぶりにお会いしたのでいろいろとお話をさせていただきました。

「モンブラン倶楽部」と出会ったのもよかネットでお世話になったからこそ。出会いという「縁」の大切さを改めて感じた日でした。

(みなみで りか)

【結】「伝えること」を学んだよかネット編集

後藤 美帆(旧姓：愛甲)

8年間お世話になったよかネットとの出会いは、機関紙「よかネット」との衝撃的な出会いでもあった。入社前、学生時代に先輩を訪ねた時に渡された数冊の手作りの“白黒”機関紙。こんな切り口で物事を考える人達がいるのかと衝撃を受けた。

入社後の初仕事がこの「よかネット」の編集作業だった。しかし、憧れていた機関紙の編集は、想像していた以上にハードな仕事だった。私が書いた文章は「谷崎潤一郎みたいに句読点が無く長い」と言われる。砂糖類とお菓子の家計消費を経年で見る表紙のグラフは、何回作成せどもなかなかOKが出ない。数字は合っているし、綺麗なグラフになっているのに…。「何が言いたいんだ。これでは伝わらない！」と何度もやり直し。へとへとになったことを思い出す。

自分の言いたいことをどう組み立て、どのような言葉を選ぶか。伝えることに妥協しない姿勢を教わった。この教訓は私の糧となり、いつ

のまにか口うるさい編集担当になっていたかもしれない。また、この経験のおかげで、自身の結婚式では、二人が選んだ品にまつわるエピソードを編集した引出物カタログを作ることができた。

結婚を機に退職し、全国で初めてすぐやる課ができたと言われる千葉県松戸市に住んでいる。一時の住まいということもあり、今しか行けない関東周辺のものづくりの場、まちめぐりに精を出している日々です。(ごとう みほ)

近 況

【結】人の熱気に溢れる上海のエネルギーを体験

今回のイギリス行きの飛行機は上海経由であった。

折角の機会なので、イギリスは早く立って上海で2泊することにした。上海は万国博覧会開催中であったことから、地下鉄及び街なかには本当に人が多く、熱気あふれる上海を体験することができた。

●リニアモーターカー初体験

上海空港から市街地への交通手段であるリニアモーターカーの最高速度は時速430km、揺れも少なく、極めて快適。リニアモーターカーは中国語で「磁遊列車」と書いてあり、そのものずばりでわかりやすい。上海市街地への地下鉄乗り換え口龍陽路駅までの約30kmを約7分で結んでいる。調べてみるとドイツの技術を導入しているとのこと。上海で最新式の公共交通を体験するとは思ってもみなかったが、本当に飛行機なみのスピードが体験できた。上海では地下鉄も体験した。地下鉄では乗車の方は、まったく降車の人を待つことがなく、一斉に乗車して来るので、ぶつかり合いは当たり前。日本も昭和40年ごろの東京では、このような風景だったのかもしれないと思った。中国人が公共交通機関で降車の人を待つようになるには、どの程度の年数が必要なのだろうか？

●上海の麺の味は日本に比べると劣る

イギリスで美味しい野菜炒め料理を食べていなかったためか、上海で食べた最初の野菜炒め

は、本当に美味しかった。全く中国語がわからないので、メニューを見ても想像で注文するしかない。紹興酒が飲みたくなったので、メニューの中の「赤酒」を指差すと、なんとワインを持ってきたので驚いた。

紹興酒は中国では「黄酒」ということを知ることができた。また、紹興酒は1本約25元（約380円程度）と安くて、美味しい。日本の中華料理店で少し上等の紹興酒は数千円であり、少々利益を取りすぎではないだろうかと思った。

麺類が食べたかったので、麺料理を頼んだ。スープは深みのある味であったが、麺自体が美味しくない。あとで馱田井先生に理由を聞くと中国人は日本人のように麺にこだわっていないとのこと。日本に帰ってきて大連出身の人に聞くと、中国でも北方のほうが南方に比べて麺は美味しいという。なぜ中国の南方では麺にこだわらないのであろうか。不思議である。

やはり南方は米文化圏であり、小麦文化圏でないからであろうか、ご存知の方がいたら教えていただきたい。

●豫園近くのダウントウンでの市場は迫力あり

上海の豫園から1kmほど歩いて何となく下町に入り込むと、路地で市場が開かれていた。これがなかなかの迫力。野菜類はもちろんのこと、カエル、スッポン、川魚、ザニカニ、鶏などが生きたまま売られていた。特に鶏は、その場で解体しており、今の日本では考えられない風景であった。上海の人々の生きる迫力を感じた次第である。



豫園近くの下町での路地市場

一方、上海には観光客の人気スポット「田子坊」というところがある。ここが、どのように発展してきたかわからないが、旧市街地の住宅地の1階部分を改装し、観光客向けのおしゃれな店が並んでいる。オリジナルデザインの衣服などもあり、上海のチャレンジショップ的な様相の店もあれば、店の中には、明らかに富裕観光客しか相手にしていないような価格の高い店もある。日本の寿司店もあり、日本の資本もかなり入り込んでいるようである。田子坊は、確かに観光客が喜びそうな品々や飲食店がひしめいているが、豫園近くのダウントウンでみた中国の本当のエネルギーは感じられなかった。

●偽ブランド押し売り屋さんに3回勧誘される

交差点でポーと信号待ちしていると、明らかに偽ブランドらしい商品カタログを持ったお兄さんが寄ってきて、購入をしつこく勧める。少々小金をもっている人の良さそうな日本人と見えるのか、2日間で3回、この方式の勧誘を受けた。ここで「ノーマネー」と強く、3回言うと、だいたい引き下がってくれた。中国では「ノーマネー」はかなり効果がありそうである。

●無謀にも万博入場を試みたが……

1日目に上海で行きたいところは、一通り終えてしまっていたので気が進まなかったが、上海万国会場に向かった。チケット売り場では並んでおらず、すぐチケットが購入（160元）できた。しかし、これが間違いの元であった。世の中に前売り券なるものがあるのを全く忘れていた。入場口に来ると、1万人近くが並んでいた。このまま列に加わると1時間以上は列から離れ



カエルも生きたまま販売している



万博入場口：あまりの人の多さに入場を諦められないと思い、潔く入場を諦め、今買ったチケットをどう売るか頭に切り替わった。

メモ用紙に160円を100円にすることを書き、チケット売り場で2人ほど声を掛けたが、あきらかに不信顔で断られ、しかも警備員にも2回注意された。

これにもめげず、中年の女性の方に声をかけると、すんなり100円を出してくれた。中国に来て、チケット売りの体験するとは思ってもいなかった。少々緊張もしたが、面白い体験であった。

最後は、南京街路の繁華街で買い物をしていると、途中、雨が降ってきた。すると、どこからともなく傘を10数本抱えた人が数人、通りに現われてくるではないか。

これは街頭での傘売り販売人なのである。頼もしい上海の商売人根性を見たと同時に、人が多いと言うことは、いろんな商売のネタはありそうだと感じた。(山田 龍雄)

総 出水市で雇用創出の検討会がスタート

鹿児島県出水市では8月から雇用創出について厚生労働省の地域雇用創造事業・地域雇用実現事業についての検討会が始まり、鹿児島県の「ふるさと雇用アドバイザーチーム」の一員として、鹿児島労働局（上枝氏）、鹿児島県雇用労政課（鮫島氏、山下氏）と共に出水市に足を運んだ。

出水市では、2年前のリーマンショック、NECやパイオニアの大型工場の閉鎖の影響により1000人規模の雇用の場が失われ、ここ2年間の人口減少は市全体で1500人減、社会減・自然減を除くと約400人が工場閉鎖の影響で他

市町村・県外に流出し、地域経済に大きなダメージを与えている。ちなみに、未だに地域で就業の場に溶け込めない方が約230人（工場関係者）いると説明があった。

出水市に限った話ではないが、大企業の工場があることを前提にしてきた地方都市の経済は、世界経済の荒波に大きな影響を受けやすい。出水市でも工場閉鎖で、地元の商業関係もより厳しい状況に直面しているようだ。

市内の電子部品製造業、食品製造業の企業2社にヒアリングしたところ、企業側は研究開発ができる高度な人材と、工場ワーカーの2種類の人材を求めていることがわかった。詳しく聞くと、企業が求めている高度な人材は、地元にはいないからU・Iターンで都市部から企業の経験者で技術を持った人を入れたいそうだ。しかし、なかなかそういう人材に出会えないらしい。一方、工場ワーカーについては、求人を出してもあまり人が集まらない、雇っても長続きしないとおっしゃっていた。

今後、地域の企業が求める人材、評価する人材の育成を自治体として取り組んでいく必要があると思われるが、その際、個別の企業や自治体の努力だけで、地域の産業を守る、育てるのは難しいと思われるので、企業や大学、研究所等、市や県の垣根を越えて広域で連携することも視野にいれつつ、成功モデルとなるよう応援したい。

企業さえ誘致できれば地域の雇用と経済が守られるという、既存の成功モデルは崩れつつある。そんななかで、自治体としてどう戦略的にリードしていくかが求められているが、基本的なことになるが、まずは地域の資源には何かあるのかをもう一度見直し、再発見してビジョン（この地域はどうやって稼ぐか）を考えてみるのが重要なのではと思う。(雪丸 久徳)

総 ご当地土産の認知度って？

●お土産は毎回悩みの種です

先月、私用で東京に行く機会がありました。その際に、東京で働いている友人に会いに行くことができることになり、友人に連絡を取ってみたところ、「九州出身の上司にも何か九州な

らではものを買ってきてほしい。そこらへんで買えるようなものはやめてね。」との注文が。はて…？何かいいものはあつたらうかと思いつながら、すでに出発は2日前。今から探す時間も買いに行く時間もありません。どうしようかと頭を抱えていると、ふと何週間か前にお土産の話をしたことが頭をよぎりました。

それは今回のよかネットでご報告した家協会のセミナーの懇親会のことでした。京都からいらっしゃった石本さんが、京都に買って帰るお土産は何がいいのだろうかと話されたところ、「ユズスコ」（言わずと知れた、柚子胡椒のタバスコ。緑色の外見はインパクトがあります。）がいいんじゃない？と誰かが一言。そこから福岡・各地の土産談義に花が咲いたのですが、ユズスコの存在をかなり前から知っていた私としては、正直ユズスコはもう古いのでは？と感じていました。空港でも販売しているので、どうももう市民権を得ている感じがしてならなかったからです。しかし、懇親会での反応は上々。あ、まだ大丈夫なんだ？と感じたことを思い出しました。

そこで、善は急げと、半信半疑で友人に尋ねてみたところ、ぜひ買ってきてほしいとの連絡がありました。本人も知らなかったらしく、まわりの九州出身者ですら誰も知らないとのこと、興味がわいたようでした。（ちなみに上司の方は大分県出身だそうです）自分の分、会社の分と3本もお願いされました。こちらではかなりメジャーだと思っていたのですが、東京ではまだまだ知られていないようです。

●さて、感想は…

後日、友人に感想を聞いてみたところ、上司にはかなり喜んでもらえたようで、会社に持って行ったユズスコも、みんなお昼ご飯中に何にでもかけて楽しんでいるようです。ある女性社員は「これ、和洋折衷どれにも何にでも合うよ！」とかけまくっているようで…なんだか友人の会社が「よかネット」化しているのが目に浮かびます。とにかく喜んでもらえてなによりです。

今回はうまくいきましたが、逆に次からのハードルを上げてしまったような気がしてならないのですが…。今度行く時はどんなものを持って行ってあげようかと楽しみです。

（寺山 香）

✿ 軍艦島に上陸できました

私の軍艦島についての知識は、

- ・軍艦に見えるから軍艦島
- ・昔石炭がとれた
- ・今は誰も住んでいない
- ・今まで上陸できなかったのが最近上陸できるようになった

というぐらいで、興味があった訳ではないですが、立ち入り禁止だった所に入れるというだけで、行く気になり、8月に行ってきました。

1日に何便か船はでていますが、どうしても夕日で逆光になった姿が見たかったので、15時半頃、伊王島を出発する便を予約しました。

受付のガイドの方に、「上陸できそうですか？」と聞くと「上陸できるかどうかは、行ってみて船長の判断で決めます。ただ、天気もいいし私の勘では多分大丈夫だと思います。」と言われ喜んだら、「私ガイドになったばかりの初心者ですけど。」と付け加えられました。

船に乗り込む前、船長さんからも「上陸できるか行ってみないと分かりません。でも頑張ります。」と言われ、なぜ「上陸できないかもしれない」という事をこんなに強調されるのかよく分かっていませんでした。私の中では、船を出せる＝上陸できると思っていたからです。

伊王島を出港してから20分ぐらいで軍艦島が見えてきて、「今から着岸準備に入りますが、時間がかかりますので、しばらくお待ちください。」とのこと。波は穏やかに見えたのですが、（私から見たら）プロの方5、6人でロープを「こっちもっと引っ張って」「そっち緩めて」など慌ただしくやって、着岸し始めてから上陸まで10分弱かかりました。

この波でこの大変さという事で、「上陸できないかもしれない」の意味がようやく分かりました。



三菱の幹部の住宅。当時は草等が生えていなかった
ので、壁を緑にしたそうです。

上陸できるルートは島の1/4ぐらいの場所に
歩道が造っており、3ヶ所見学広場といった説
明を聞く場所がありました。

ガイドの方(受付の方とは別の方)は、当時
の写真を見せながら、説明してくれました。

- ・一番人口が多い時は、昭和33～34年頃で人
口密度は約830人/haであった。当時の東京
の9倍もの密度であった。
- ・坑道の中は気温40℃、湿度90%になる時
もあり、ガスが発生し爆発の危険があったり、地
圧が何トンもかかったりした。
- ・高波の被害を受けにくい高台にあるアパ
ートは、三菱の幹部の住宅で風呂付きだった。
- ・高波を受けやすい場所にあるアパートは
窓が小さめに造ってあった。
- ・学校は1つの建物に1～4階が小学校で
その上に中学校があり当初三菱の社立で、大正10
年に町立になった。
- ・床屋や映画館等の娯楽もあり何でもあ
って、無いのは高校と斎場ぐらいといわれていて、
一つの街を形成していた。
- ・昔は建物の明かりがあったが無人島に
なっから灯台が造られた。
- ・B'zの「MY LONELY TOWN」という曲の
プロモーションビデオは軍艦島で撮られた

編集後記

今回のよかネットは、節目の100号とい
うことで、OBの皆様にもお忙しいところ無理
を言って記事を書いていただきました。誠に
ありがとうございます。お陰様でいつもよ
りボリュームが多く、編集作業が大変でし
たが(汗)、先輩方のご活躍は後輩の我々の
励みになっております。(は)



夕日をバックに逆光で撮ろうと思ったら、日がまだ
沈んでくれなかった。

ションビデオは軍艦島で撮られた

等
一番びっくりしたのは、すごく昔の事だ
と
思っていたら、昭和49年に炭鉱が閉山し無人
島になったという事で(そんな事を最近知った
事の方がビックリだという方もいるでし
ょうが)、結構最近までここに人が住んで
いたという事です。だとしたら、軍艦島の
小・中学校に通った方もご健在なの
だと思えました。

帰りに気になった事があったので、
ガイドの方に「上陸できる確率ってどの
くらいですか?」と聞いたら「船が出
せた場合で6、7割ぐらいです。船が
出せない事もありますし。」とのこと。

現在残っている部分も高波で崩れて
いく可能性があるとのことなので、その
前に、遠くからしか見られなかった北
側など、立ち入れる場所が増えて欲
しいなと思えました。

(佐伯 明日香)

よかネット No. 100 2010. 10

(編集・発行)

株式会社よかネット

〒810-0802 福岡市博多区中洲中島町3番8号
福岡パールビル8階

TEL 092-283-2121 FAX 092-283-2128

<http://www.yokanet.com>

mail:info@yokanet.com

(ネットワーク会社)

株式会社地域計画建築研究所

本社 京都事務所 TEL 075-221-5132

大阪事務所 TEL 06-6942-5732

東京事務所 TEL 042-501-2531

株式会社地域計画・名古屋 TEL 052-202-1411